

漢字の運命

昭和二十七年に刊行され、長期にわたって読まれた本に岩波新書『漢字の運命』がある。当時、東大文学部の教授であった倉石武四郎博士が、大学で行った講義を骨組みに一冊にまとめたといふ本ださうであるが、私の手元にあるのは四十七年発行の第十七刷のものであるから、二十年といふ長きに亙ってほんとに多く読まれたものだと思ふ。

五章に分れてゐて、その以後の章が書名と同じ“漢字の運命”となつてゐる。ここには、日中両国の国語国字問題の歴史がかなり精しく述べられてゐるが、それは、「近代化に重大な障害になると認められる漢字を追放しようとする努力の歴史」についてである。

その中には、「漢字は封建社会に養はれ、またそれで培つて来た」こと、又「漢字に、近代化国家の文字としての希望を寄せることは難しい」といふことが、繰返して述べられてゐる。

そして、終りに近い所で、中国の現況として、新文字政策が廃棄されたかに見えるが、「私は否と言ひたい」と言ひ、更に、「漢字は中国が近代化するにつれて追放される運命にあることは予言して憚らない」と言つてゐる。

最後に、日本の漢字の運命について、「漢字の性格として、近代化

に抵抗し、封建性を擁護するものを含む以上、それは世界史の大勢から言つて、遂に亡び去るものと思はれる」と予言してゐる。

そして、「問題は、それがいつ亡びるか、また、(中国と日本と)どちらが先に亡びるかだけである」とまで言つてゐる。更に、「中国で千辛万苦の末に漢字の追放を完了した時に、日本ではまだ二千に近い漢字を使つてゐる、と言つた状態も考へられる」と言ひ、「その時は、本国で追放された亡命文字を、懇切にも保護してやるほど義侠的な国民だといふ評判が立つかも知れない。ただ、その盛事を、現在生きてゐる日本人は誰も見る事が出来ない、といふのはまことに遺憾なことである」と、いかにも皮肉たっぷりな文章でこれを結んでゐる。